

都市と農村をつなぐフットパス！



「幌向運河」や「幌向駅通」などの地域に現存する歴史・産業遺産や「水と緑」に恵まれた美しい景観と豊かな環境。2009年4月16日に設立されたNPO法人ふらっと南幌は、これらの地域資源を活用し、道央都市圏からの優れたアクセス条件を生かした都市と農村の交流型・体験型観光・「田園型のフットパス・ウォーキング」を精力的に実践しています。さらに、それらを通じた有機農業の高付加価値化や地域ブランド化、優れた環境・景観の維持・保全などの活動を主軸に、南幌らしい「真に豊かな暮らし」の実現が着々と準備されて成果をあげています。

代表理事、濱田暁生さんに取り組みの経緯や活動内容、今後の抱負などをうかがいました。

隠された宝物探し

まちづくり、景観形成、住宅・施設計画などのコンサルティングを行う(株)シー・アイ・エス計画研究所代表取締役会長の濱田暁生さんが南幌町と関わるようになったのは、2000年に町の総合計画、都市マスタープランの策定に関連した「まちづくりフォーラム」に講師として招かれたのが始まりでした。講演前に町の現況を見ておこうと町内をゆっくりと見て回ったのですが、住宅地はしっかりと計画され、市街地もコンパクト、水田の広がる田園地帯の景観は美しいと感銘を受けました。特に印象に残ったのは、他の市町村に見られるような道路沿線の廃業ドライブインや無秩序な看板などの景観阻害要素が非常に少ないことでした。そこで、講演の際に「南幌町は“きれいなまち”“景観汚染が進んでいないまち””とお話しましたが、地元の方々は見慣れている風景を特段美しいとは思っていませんでしたし、南幌のまちの特性に気がつかれていない様子でした。そこで、「このまちの魅力：“隠された宝物”がきっとあるはずですよ！それを探しませんか」という提言をしたそうです。

それをきっかけに「南幌町街なか活性化委員会」の町民有志と行政の勉強会に講師として継続的に参加することになり、そこでの提言に対して、開発局の「ボランティア・サポート・プログラム」の活動をさらに広げようと考えていた人たちが敏感に反応し、自分たちのまちを見直し、南幌にある資源を再発見する動きを始めました。



濱田 暁生
NPOふらっと南幌代表理事

NPO法人ふらっと南幌

地域の歴史を調べて行くと、単に古い建物だと思っていたものが開拓の歴史の中で重要な役割を果たした「駅通」だったり、今まで「町中を流れる目立たない小川」だと思っていたものが開拓時に舟運によって物資や人の輸送に大きな役割を果たした「幌向運河」だといったことがわかり、それらの地域資源を大事にしたまちづくりというテーマが見えてきました。

まちの歴史を“祭り”イベントで発信！

こうした動きを受け、街なか活性化委員会は外部から専門講師を招き「駅通」「運河」の継続的な勉強会を行い、その内容とともに「運河」や「駅通」の存在を広く発信していくために2000年から「幌向運河駅通祭り」(06年からは「運河祭り」と名称変更)を企画し、ゴムボートで運河を下り、ゴールで昼食に南幌ジンギスカンを食べるというイベントを何年間か続けました。回を重ねるにつれ、たくさんの方々に参加するようになりました。当初は運河沿いの整備されていないあぜ道を使ってゴムボート運搬する苦労がありましたが、北海道開発局の事業で運河沿い河川管理用道路や運河に降りる石段が整備されてイベントがしやすくなったといいます。

「運河下りも参加者が増え、ゴムボートが足りなくなってきたことから、ボートと歩いて下る人に分け、さらに足の弱い人や子供たちのことも考え、どさんこ(北海道和種馬)を連れてきて馬車で移動する試みもやってみました。馬車に乗ると視点が高くなり、そこから見える田園景観が素晴らしくきれいだということを発見、これも柱の一つになりました」と濱田氏。

後発の素人が開いた“フットパス”の可能性

イベントの参加者から「あなた方のやっていることは、イギリスでは“フットパス”というのだよ」というヒントをもらって調べてみると、これは面白いということになり、2004年ごろからはフットパスも活動の大きな柱にしたといいます。

濱田氏の仕事上のネットワークもあり、2006年、新得町で開催された第5回全道フットパスの集いに「街なか活性化委員会」の近藤長一郎氏が参加。各地の団体が活動内容を紹介する場で「来年の全道大会を南幌で開催して下さい」と大胆な提言。07年の全道大会は

既に10月にニセコでの開催が決まっていたのですが、急きょ6月に南幌でも実施することになりました。

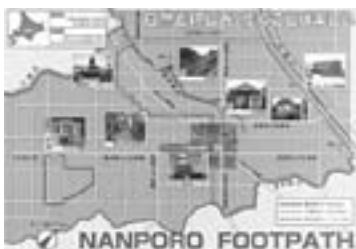
07年6月、南幌で開催された第6回全道フットパスの集いには、全道からフットパス先進地の人たちが70名も集まりました。先進地の取り組みはどちらかというアウトドア系で20kmを歩くといったハードなものが多いようでしたが、後発の南幌のフットパスは、街づくりイベントの延長で子供連れや高齢者もいてハードなメニューは無理でした。そこで、距離を短(3~4km)・中(6~10km)・長(15~20km)に分け、コースの途中で地域の歴史や農業にふれ、「運河下り」や「地元の美味しい食」などを楽しめるものとなりました。その結果は、“目からうろこ!”で、日帰りでも帰るつもりで参加者が一泊して話を聞いて帰りたいと大好評。先進地の人たちからも高評価をいただき、少し方向が見え出しました。

“ふらっと南幌”の立ち上げとNPO化

こうしたことから07年秋ごろには、フットパス・ウォーキングを中心とした地域活性化を進めるために街なか活性化委員会のメンバーを中心にした別組織をつくらうという話になりました。

当時は行政が地域活動の受け皿としてNPOの立ち上げを奨励する動きが盛んでしたが、行政主導型のNPOはうまくいかないことが多く、運営に関しての苦労も多く聞いていましたから、当初、NPO化について慎重だった濱田氏は、行政からの財政補助がなくても活動ができるよう、また「NPOを作ることを目的にするのではなく、自分たちが活動しやすくするための仕組みとしてのNPOにしよう」と考えました。

フットパス・ウォーキングは、参加者が一定の時間地域に滞在し、地元の食材を食べる楽しみや農家との交流もメニューに組み込むことが可能で、消費もしてくれます。「ふらっと南幌」が情報発信やオペレーションをし、参加者はガイド料やマップ類の費用を負担、農家の農産物や地場特産品を買って帰り、リピーターになっていきます。これをしっかりやっていくことで、「ふらっと南幌」が地域へ経済波及効果のある役割を果たし、活動財源も生み出していけるという考えに基づいて、08年6月にNPOふらっと南幌準備委員会を



フットパスマップ



田園の中の運河下り



発足させ、道への申請手続きを進め、翌09年4月にNPO法人として認定されます。

アグリルネッサンス南幌フォーラムの開催

農業は南幌町の基幹産業ですから、農業とまちづくりの関係をしっかりと見直しながらNPOが果たせる役割を定めていこうというシナリオで、2008年11月から09年3月までNPO設立に向けての「アグリルネッサンス南幌連続フォーラム」を5回開催しました。

北海道全体を視野においた地域力、体験型・交流型観光における農の可能性などをテーマに毎回多才な方々の講演が行われましたが、第2回フォーラムでのパネラーの地元農家の奥さんの「農協に農産物を卸しているだけでは実感がない。100円でも200円でも直に売るとうれしい。私の農業の喜びは現金収入です」「自分たちが作っている物を消費者がどう感じてくれるか?それがわかることができ、とても励みになります」という本音の発言がヒントになり、フットパスの途中で農家の方に農業への思いを語っていただき交流の機会をつくるなど、フォーラムの積み重ねがフットパスの魅力づくりにつながっていきました。

都市と農村を対等な関係でつなぐ

従来の都市と農村の交流は、どちらかという都市のために農村がサービスするという構造が多かった。私は、それを来た方も喜ぶ、地元の方も喜ぶ、間をつないだ私たちもうれしいという対等な関係にしたかったのです。最初は全員が同じ意識ではなかったのですが、このグループはしっかりとルールを守るからと説明して農地の中を歩かせてもらううちに、農家の人たちも「大丈夫だったし、野菜をたくさん買ってくれる」と農業の後押しをしてくれる活動であるという実感を持ちはじめました。フットパスの参加者は、直売所で買う一般の人の3倍も買ってくれるそうで、その理由の一つは、リュックサックを担いでいるのでたくさん物が入られる。もう一つは歩きに来る人たちは自然環境、健康や食物の安全性などに関心が高いのです。今では「フットパスに来る人はいいいお客さんだからたまにはうちも通って」と農家の方にいられています。

ウィークエンドハウスで、移住・定住に貢献!

フットパスでは町内の住宅団地の中も歩いてい

す。区画も広く、緑地もある、とても魅力的ですが、「売れ残った住宅地」も結構あります。農業に対する消費者とつなぐ役割と同じように、そこを歩いて住宅団地の魅力を発見してもらい、「農」に近い住まいの環境という魅力をPRして、移住・定住につながる動きも意識しています。それには、連続フォーラムでの佐藤誠先生の「ライフウェア産業とダーチャ」のお話やエコロジスト、コミュニティーデザイナーの坂本純科さんの「エコビレッジ〜コロニーヘーブ」の考え方が参考になりました。

元気な間は都会で働いて、休日にはそこに行き周りの畑で農作業をしながら、退職後に移住・定住するというライフスタイルです。農業や土地利用に関する法制度上の足かせがありますが、規制緩和の流れもあり、「特区」などの仕組みを活用してNPOがきちんとスキームを作って手伝えないかと考えています。

月例のフットパスは事前予約なしで!

「ふらっと南幌」では、フットパスが広がらない原因の一つは事前予約制ではないかと感じました。当日天候や都合が悪くても行かなければならない、こころの負担になるし、行かなければお金は取られたままといいところが多い。そこで、月例の「ふらっと南幌フットパス」では、事前予約なし、受付等の面倒な手続きもなし、参加者は第3日曜日10時に南幌町のバスターミナル「ビューロー」へ集合するだけで参加できるという方法にしています。コースも3種類用意し、地元のガイドが案内します。最初は不安もありましたが、初回から30人近い方が参加したそうです。また、集合場所がバスターミナルである立地条件を活かして、ワインやビールを飲んだりできる楽しみも増え、今では月1回では追い付かないほどメニューや回数が増えています。

ふらっと南幌には、「ふらっと」来てもらい、南幌町の平らな地形「フラット」を歩いてもらうという意味が込められています。濱田さんは、「来た方が楽しんで、農家も喜ぶ。その生の声を現場で聴けるので、私たちも学ぶことが非常に多いです」といいます。

NPOふらっと南幌

<http://www.flat-nanporo.com/>



第10回全道フットパス大会



月例のフットパス



かんじきフットパス